Nature Wisdom

Photography ｜ Kazashito Nakamura
Text ｜ Maaya Ishimine

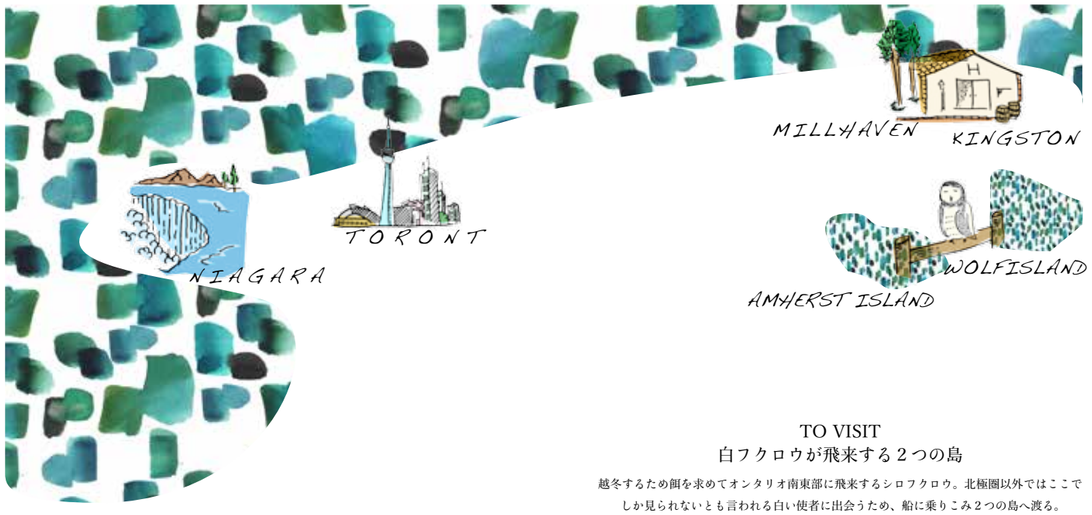
陽の出ずる方角、東
太陽の光が新たな一日を呼びよせ
大地のエネルギーが花を咲かせるように
すべてはここから始まった

ファーストネーション（先住民）の叡智に誘われ、カナダのオンタリオ州を訪ねることになった。昔の人は、当たり前のように地球の声に耳を傾けていたようだ。自然が私たちに教えてくれる多くのこと、その上に文明が築かれていくことを、彼らは知っていたのだろう。遠い記憶の中に忘れかけているものを確かめるように、聖地に足を踏み入れる。そこに待っていたのは、美しく輝く水、風のささやき、それらに呼応する大地との出会いだった。聖者の使いシロフクロウに案内され、時が動き始める。旅の始まりを感じた。

Produce ｜ Ontario Tourism Office ｜オンタリオ州観光局
Cooperation ｜ AIR CANADA

Snowy Owls
in Amherst & Wolfe island

シロフクロウは、まるで雪をまとっているかのように美しい。
その大きな翼を広げて飛ぶ姿は力強く、なんとも優雅である。
深い森の中に佇む賢者に、島の歩き方を教えてもらった。



TO STAY
島渡りの拠点にするホテルはリゾート感も十分

いつもより早く目が覚め、部屋のカーテンをあける
そこにはまたこの地を訪れたくなるような印象的な景観が待っていた

◇ Inn at Huff Estates
住所｜ 2274 Prince Edward County Rd 1, Bloomfield, ON K0K 1G0, Canada
WEB ｜ https://huffestates.com/

ブドウ畑に囲まれている Inn at Huff Estates は、ワイナリーやギャラリー、庭園が隣接するカントリーホテル。

◇ The Drake Devonshire
住所｜ 24 Wharf St, Wellington, ON K0K 3L0, Canada
WEB ｜ http://www.drakedevonshire.ca/

プリンス・エドワード・カウンティにある The Drake Devonshire は、現代アートが目を引く人気のホテル。細部まで洗練された空間は、食事だけでも立ち寄りたくなる設えだ。

TO VISIT
白フクロウが飛来する２つの島

越冬するため餌を求めてオンタリオ南東部に飛来するシロフクロウ。北極圏以外ではここでしか見られないとも言われる白い使者に出会うため、船に乗りこみ２つの島へ渡る。

AMHERST ISLAND

アマースト島はオンタリオ湖東端に位置し、フクロウや鷹など多くの猛禽類の越冬地として知られている。島の東部にある「Owl Woods」と呼ばれる小さな森は、北米屈指のフクロウ探鳥地。運がよければキンメフクロウなども観察できる。
フェリーは一年を通して同じ港（本土側港：Millhaven / 島側港：Stella）

WOLFE ISLAND

アマースト島の東隣りに位置するウルフ島は、セント・ローレンス川に浮かぶ「サウザンド・アイランド」の中で最大の島である。フェリーはシーズンで以下のように港が変わるので注意。
（5月～11月）本土側港：Kingston / 島側港：Marysville
（12月～4月）本土側港：同上 / 島側港：Dawson's Point

Niagara

1
“大地の割れ目を感じる”
空｜ Niagara Helicopters
上空から眺めれば、カナダ滝が別名「馬蹄滝」と呼ばれる理由にも説明がいらない。

「オンタリオ」は、先住民イロコイ族の「カナダリオ」という言葉に由来すると言われており、これは「美しい水・輝く水」を意味する。その名の通り、五大湖やハドソン湾、セント・ローレンス川などの豊かな水に恵まれているのがこの土地の特徴だ。その中でも、世界三大瀑布のひとつとして知られているナイアガラの滝は、かつてインディアンの聖地だった。「ナイアガラ」は、インディアンの言葉で「ニアガル（雷鳴の轟く水）」の意味があるとされているが、これに学術的な証拠はなく、語源には様々な説がある。しかし、圧倒される水量と水しぶき、辺りに鳴り響く轟音…ナイアガラの滝を前にすると、その呼び名に頷くよりほかないだろう。この滝は一体どのようにして誕生したのだろうか。その答えを辿ると、およそ１万2000年前の氷河期にまで遡る。地球の大部分が厚い氷で覆われていた当時、急激な気温上昇が原因となり、北アメリカ大陸を覆っていた氷河が一気に溶け出した。その激流が大地を削り、巨大な滝が形成されたのだ。世界中の人々を魅了し続けるナイアガラの滝。力強さと神秘的な美しさを併せ持つその姿を様々な角度から眺めてみると、まるで大自然が創造した芸術のように感じられた。

ゆっくりと目を閉じ
自分の内なる心と対峙する
先住民にも聞こえていたであろう水の声が
滝つぼの精霊によって運ばれてくる

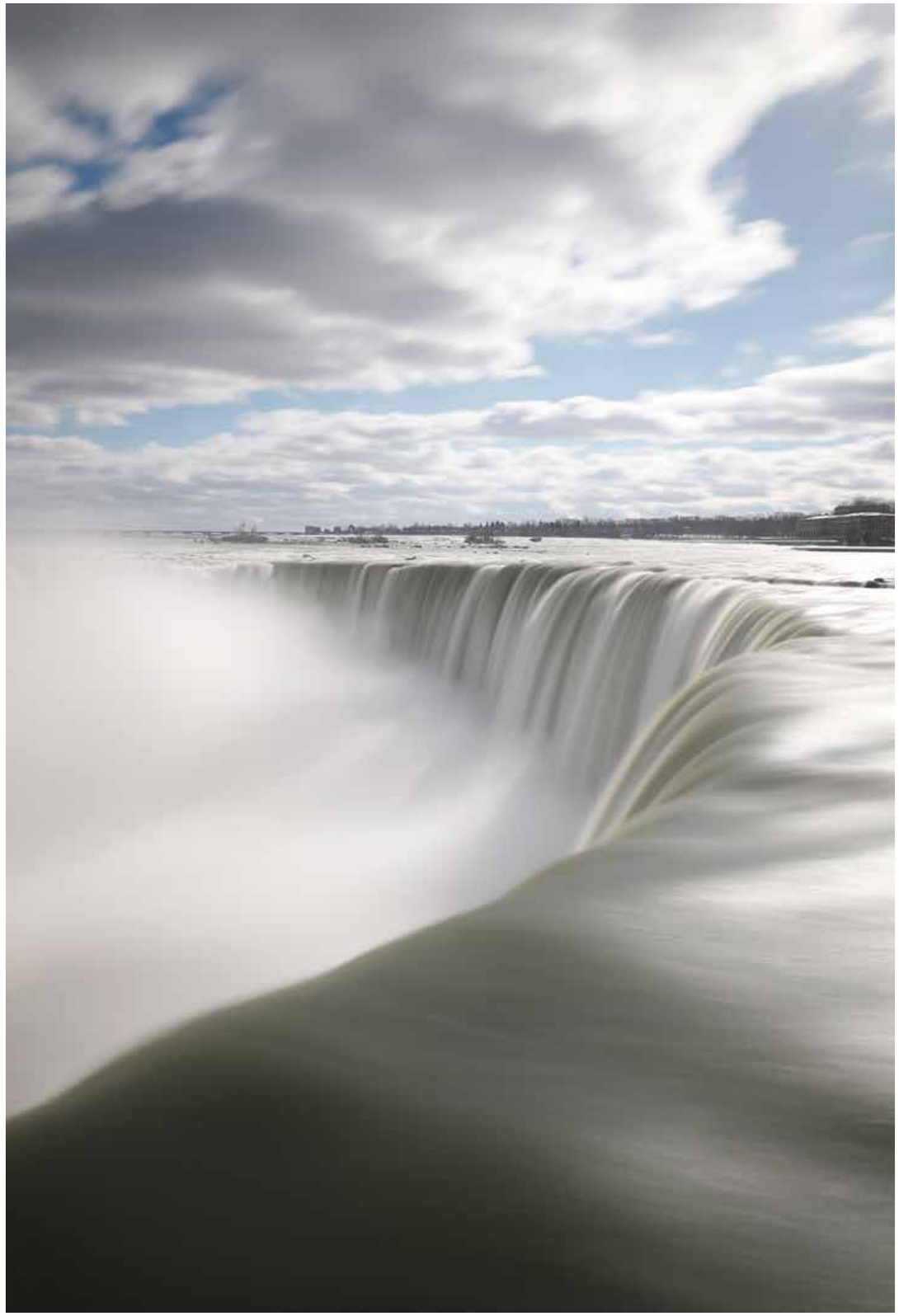
4 ways to see the waterfall

2
“雷鳴と飛沫を浴びる”
観瀑台｜ Tablerock
テーブルのように張り出した場所から滝が一気に流れ落ちていく様子を間近にみることができる。雷鳴と呼ぶのにピッタリな轟音も、肌に触れる霧のような飛沫と合わさって何だか心地良い。

4
“真冬だけの特別な銀世界”
塔｜ Skylon Tower
街で一番高い場所にある展望塔では、実際に外に出て、真冬の空気を感じながら滝を眺めることができる。滝が創り出す幻想的な銀世界に、このときばかりは凍てつく寒さも忘れてしまう。

3
“神が宿る場所へ”
滝裏｜ Journey Behind the Falls
トンネルを進んだ先に見えるのはカナダ滝の裏側だ。陽の光を浴びた氷が美しく輝いている。冬の顔を見せる滝を眺めながら、神が宿る場所と信じた先住民に想いを馳せる。

170201_ApartJournal創刊準備号.indd 8-9
2017/03/24 10:12



すべてのものが円を描いています
私たちは自分自身の行ないに、それぞれ責任をもっています
それが円を描いて戻ってくるからです

ベティー・レイヴァデュー（オジブワ族）

Everything's making circle.

We are responsible for what we do.

Along the circle, all we did would return to ourselves.

先住民の声に心を向けてみると、彼らは「円環」という時の中で生きていることがわかる。「死」への恐れというものを全く感じさせない死生観も、ここからきているようだ。春になれば、新しい芽をつけ花の香りを漂わせる。夏は太陽が力強く私たちを勇気づけ、秋になれば美しい紅葉に心を落ち着かせる。冬は静かに自然が眠りはじめ、溶け出す氷がまた春の訪れを口ずさむ。そうして、大きな円環を描いて季節が巡り続けるように、先住民にとっての「死」とは、次の世への始まりなのだ。「死」を季節が巡るように美しいことだと尊ぶ彼らにとって、それは宇宙のプロセスのひとつに過ぎない。

ジョセフ・ブルチャック（編）中沢新一・石川雄午（訳）『それでもあなたの道を行け NATIVE WISDOM インディアンが語るナチュラル・ウィズダム』P126

170201_ApartJournal創刊準備号.indd 10-11 2017/03/24 10:12

過去を学び、過去にしたがって行動することが大切です
そうすれば、私たちはこれからも
ずっと大地に住み続けることができるからです

イグネイシャ・ブローカー（オジブワ族）

We should do as we studied in the past.
Then we hopefully will stay here,
Our mother land.

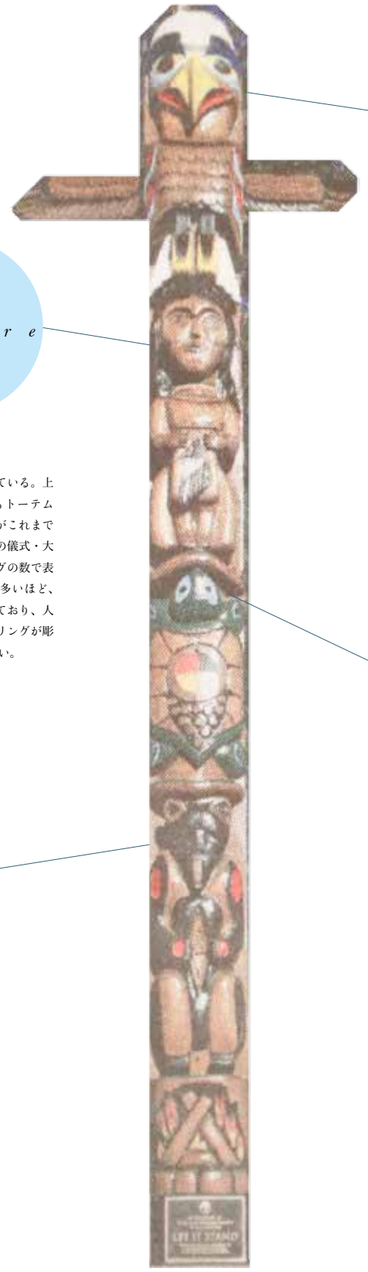
動物や植物、大地はすべて家族であり、生命の源である。これは、あるひとつの部族に限らず、どの部族にも広く共通している思考だ。遠い祖先たちを観察し、自然がなければ生きていけないことや、季節を変化させることのできる者などいないことを学んでいたのだろう。物事の原点を知り、考え、自分に問い、過去から学び、行動することの重要性を、彼らはよく理解していたように思う。それらがまた、自分の内なる声、秘められた力に辿り着くための道標になることも。こうした先住民の言葉や生き方には、現代人が日々の暮らしの中でつい忘れてしまいがちな大切な知恵が隠されているのだ。

ジョセフ・ブルチャック（編）中沢新一・石川雄午（訳）『それでもあなたの道を行け NATIVE WISDOM インディアンが語るナチュラル・ウィズダム』P70

170201_ApartJournal創刊準備号.indd 12-13
2017/03/24 10:12

First Nation

先住民は独特な文化と共にカナダの石杖をつくった。
その歴史の中で紋章として作られたトーテムポールからも、彼らの叡智に触れることができる。
森の中で朽ちかけている姿は、まるで自然に帰るのを待っているかのようだ。



feature 1

“サンダーバード”
Thunderbird

トーテムポールの一番上の彫刻がその一族を見分ける象徴（シンボル）になっている。サンダーバードは、特にクワキウトル族にとって地位が高いものとされていた。翼を広げ羽ばたけば雷が轟き、瞬きをすれば目から稲妻が起こるという伝説も残っている。リーダーシップの象徴でもあり、幸せを運ぶとも言われている。

feature 2

“人間”
Human

人間は人生そのものを表している。上部にリングが刻まれているトーテムポールは、ポールの所有者がこれまでに行ったポトラッチ（贈答の儀式・大規模な祭り）の回数がリングの数で表されている。数が多ければ多いほど、力の強い村である証とされており、人型がある場合は、その中にリングが彫られていることが多い。

feature 3

“亀”
Turtle

ゆっくりと歩く亀は、その穏やかで優しい様子から、母なる大地のシンボルを表す。硬い甲羅は「女性の守り神」を意味するとも言われ、亀を尊ぶ部族は多い。創造力や知識を高める力、基礎的能力を高め、祖先との絆を結ぶ意味合いもある。また、行き先がわからなくなってしまった時には方向を示してくれる。

feature 4

“カエル”
Frog

蛙は、安定、純真、コミュニケーションの象徴とされている。また、水のシンボルでもある蛙は、雨をもたらす動物を意味する。コミュニケーション能力に長け、地と水のふたつの世界を旅しながら生きる蛙は、両世界の伝達者、仲裁人とも言われている。人間の身に降りかかる危険を警告したと言われる伝説も。

アクセサリーやペインティング
それは意志を身につけ、飾ること
We wear things, we wear will.

先住民は、様々な種類の自然や動物をモチーフに使用してきた。ある部族はジュエリーに彫り自身で身につけ、ある部族は刺繍にして狩りに出る夫に託していたそうだ。それは、宇宙と共に生きる彼らにとって、自然や動物たちもまた、とても大切なものである証なのだ。また、彼らは生まれたときから自分のシンボル（自然や動物）を与えられており、その意味を理解し、いつも身につけることによって幸福が訪れると信じていた。今回の旅で出会った人たちの物語に触れると、その想いは現代にも受け継がれているように思う。自分の心に素直に、好きなものとシンプルに心地よく暮らすことを大切にする生き方からは、決して捨てられることなく続いていく、ファーストネーションというアイデンティティーを感じた。

ヘンドリックさんにとっての絵
Hendrick has the paintings made by name of the works.

北東のアニシュナベ族出身の Rick Beaver が描いたこの絵を紹介してくれたのは、鳥好きのヘンドリックさん。生き物を少しずつ自分のスタイルに変えて描くその手法も、彼の心をつかむ理由のひとつだ。

ロンさんにとっての
自然に穴の開いた石の首飾り
Ron is wearing a stone with natural hole.

この石の由来はカンブリア期にまで遡る。英国ではこの石の穴を通せば妖精が見えると伝わり、ここオンタリオでは "Wishing friends back"（友人の再来）を意味する。大変貴重なものでダイヤモンドよりも価値のある石とも言われている。

マチルダさんにとってのカーディナルペンダント
Matilda has a neckless shaped Cardinal Bird.

マチルダさんが見せてくれたのは、カーディナル（赤い鳥）のペンダント。出で立ちからも見て取れるように、赤色が好きらしい。彼女は穏やかな笑顔でこう言っていた。「赤が好き。鳥が好き。だから、これは私のお気に入りなのよ」。

聖者シロフクロウと出会うまで
多くの生き物たちと話すことになる
その度に彼らは幸せをくれるだろう

白く深い森の中をゆっくりと歩く。雪を踏む音がこんなにも心地良いと感じたのはいつぶりだろうか。肌をなでる冷たい空気が五感を研ぎすませてくれる。鳥のさえずりもまた、雪景色を優しく彩っているようだ。自然豊かな土地を訪れる楽しみのひとつに、珍しい野生動物たちとの出会いがある。季節が巡れば、木々は実をつけ花を咲かせるように、動物たちもまた自然と共に生きている。彼らに強さと美しさを感じるのは、厳しく変わりゆく自然の中で生き抜く力をその瞳の向こうに見ているからかもしれない。巡り合わせを楽しみながら、さらに森の奥へと歩みを進めていく。

アメリカリス
American Red Squirred

アカギツネ
Redfox

ユキホオジロ
Snow Bunting

セジロコゲラ
Fairly Woodpecker

ショウジョウコウカンチョウ
Northern Cardinal

アメリカコゲラ
Black-capped Chikadee

170201_ApartJournal創刊準備号.indd 14-15 2017/03/24 10:12